

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00113

研究課題名（和文）撰関期・院政期僧俗の呉越・北宋との相互交流と思想的影響

研究課題名（英文）The mutual exchanges and ideological influences between Buddhist and lay communities of the regency and insei (cloister government) periods and Wu-Yue and Northern Song dynasties

研究代表者

吉原 浩人 (YOSHIHARA, HIROTO)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80230796

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の平安時代中後期、すなわち撰関期・院政期の僧侶と、浙江地方を中心とする呉越・北宋の仏教界の思想・文化的交流、そして文人貴族の対外認識について、統一的に把握し闡明することを目的とした。

中国では、唐末五代の乱によって寺院が荒廃し、日本に典籍を求める動きが活発化したが、相互交流の中で、日本の仏教界では、教学上の疑問を解決したり、書籍を中国に贈り評価を求める動きが顕著となった。本研究では平安中後期の、仏教・対外認識・文学表現を、同一の視点から分析し、従来指摘されていない日本思想の新たな本質に迫ることを目指し、一定の成果を挙げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究期間の前半は新型コロナ禍の影響を受け、特に国際交流が停滞したが、期限内に論文・註釈7本を執筆し、国内外での講演・研究発表20回（うち本研究共催国際研究会3回）を行い、社会に向けて成果を発信することができた。また本研究は、中国の国家社会科学基金重点項目「古代中日佛教外交研究」（江静代表）と連動させ、グローバルな視点から研究を推進することができた。研究課題の一つである、永観『往生捨因』と撰者未詳の『心性罪福因縁集』について出典調査・訳註を行い、ともに3年以内に訳註を出版する予定である。また『聖徳太子伝暦』の本文テキストも、2年以内に刊行する準備を進めている。

研究成果の概要（英文）：In this study, I aimed to comprehensively understand and elucidate the ideological and cultural exchanges between Buddhist monks of Japan in the mid- to late Heian period, specifically the regency and insei (cloister government) periods, and the Buddhist communities of Wu-Yue and Northern Song dynasties, centered around the Zhejiang region in China, as well as the external perceptions of the Japanese literati aristocrats.

In China, due to the turbulence at the end of the Tang dynasty and the Five Dynasties period, temples fell into ruin, prompting an active search for the Buddhist scriptures in Japan. Amidst this mutual exchange, it became prominent in the Japanese Buddhist community to resolve doctrinal questions and to send books to China seeking evaluation. By attempting to uncover a new essence of Japanese thought that had not been previously identified, this study has achieved certain results.

研究分野：日本宗教思想史

キーワード：撰関期・院政期 呉越・北宋 日中相互文化交流 源清 源信 天台本覚思想 慶滋保胤 『心性罪福因縁集』

1. 研究開始当初の背景

研究開始の研究計画調書の「概要」には、以下の通り記述した。

中国では、唐末五代の乱によって寺院が荒廃し、宝蔵の貴重な文献が数多く失われた。その復興にいち早く乗り出したのは、呉越の王と僧侶たちで、高麗や日本に使節を送り書籍を求めた。海商たちの船には、商人ばかりでなく僧侶も乗船しており、相互交流が行われるようになった。平安中期の仏教界では、教学上の疑問を解決したり、書籍を中国に贈って評価を求めたりする動きが顕著となり、平安後期になってもその動きは続いた。

本研究では、日本の平安時代中後期、すなわち撰関期・院政期の僧侶と、浙江地方を中心とする呉越・北宋の仏教界の思想・文化的交流、そして文人貴族の対外認識について、統一的に把握し闡明することを目的とする。本研究では、これまで仏教学・歴史学・日本文学の分野で別々に研究されてきた、撰関期・院政期の、仏教・対外認識・文学表現を同一の視点から分析することによって、従来指摘されていない日本思想の新たな本質に迫ることを目指すものである。また、中国の基盤研究(A)に相当する、国家社会科学基金重点項目「古代中日佛教外交研究」とも連動させ、グローバルな視点から研究を推進する。

申請を行った 2019 年秋には、新型コロナ禍とそれに伴う混乱については全く想像もできず、中国の科研費と連動させて、杭州と東京を互いに往復しつつ、共同研究を深める計画であった。ところが 2020 年度はじめから、新型コロナの蔓延により、国際交流はほぼできなくなり、これが 2022 年度後半まで続いた。2023 年春からは、ようやく中国に渡航できるようになり、急速に中国側との共同研究を進めたが、当初計画から大幅な修正を余儀なくされた。2022 年度後半からの努力により、おおむね目的を達成できたといえよう。

2. 研究の目的

永延二年(988)、源信が博多において『往生要集』を、宋商朱仁聡と杭州孤山水心寺僧齊隱に託し、天台山国清寺への奉納を委託した。長徳元年(995)、両者が再度若狭に来訪し、杭州奉先寺源清の牒状と典籍を携えて来日した。源清自著の『法華十妙不二門示珠指』二巻・『龍女成仏義』一巻などを、天台座主暹賀に贈り、戦乱で失われた佚書を求めた。この際源清は、新撰の五部の典籍について批評を求めたため、山門・寺門の名僧が破文を執筆し、多くの僧侶の目に触れることとなった。この返牒は、朝議を経て大江匡衡に依頼があり執筆することになる。当時、北宋の天台宗は、明州・天台山の四明知礼を中心とする山家派と、杭州の奉先源清を中心とする山外派に別れ、天台教学の解釈、特に唯心論と実相論をめぐって対立していた。こういった中で、杭州の永明延寿の唯心思想の流れを汲む、源清『法華十妙不二門示珠指』が新たに撰述された。その巻上に、「心・仏・衆生、三無_二差別_一、煩惱性中、具_二如来智_一」という一節がある。心と仏と衆生の、三つには差別がなく、煩惱性の中に、如来の智慧が含まれるとする。この思想は、日本で成立したとされる天台本覚思想に直結するものである。しかも類似の表現は、永明延寿(904~975)に仮託される『心性罪福因縁集』に頻出する。多くの話は「是故_レ応_レ知、心・仏・衆生、三無_二差別_一。応_レ觀、法性寂靜真如、一切法不思議故」という定型句によって結ばれているからである。本書は、日本撰述の偽書であることを吉原が証明したが、このような思想は、どこから来て、

どのように日本で広められていったのか、まだ解明できていなかった。

従来は、裔然・寂照・成尋など渡宋僧の実際の活動や、文人貴族の牒状執筆の背景などに焦点が当てられてきたが、本研究では文献の内容を詳細に分析することによって、思想・文化の背景を解明することを目的とした。この時期、大江朝綱・大江匡衡・慶滋保胤・大江匡房らの文人は、渤海・呉越・北宋・高麗への対外文書作成にも携わっていたが、これらの文献も、出典を一字一句検討することによって、対外的に何を伝えようとしていたか、明らかにはされていなかった。従来の研究は、仏教学・文学・歴史学・美術史学などの各分野で専門的に深く追求はするが、他分野への目配りが足りないものが多いかった。特に、中国文学・日本文学研究者は、仏教学・仏教史への専門的知識がないため、註釈に誤りが多く、的外れな論述が多く見られる。本研究は、各分野の先人の研究を渉獵した上で、精緻な註釈を作成し、それらを統合した新たな見解を提示することに目的があった。

3．研究の方法

呉越・北宋期浙江の仏教は、海に向かって開かれていた。呉越国時代、銭塘（杭州）の永明延寿（904～975）が撰述した『宗鏡録』百巻・『万善同歸集』三巻は、日本にも伝えられていた。中国では唐末五代の動乱で失われた経論を高麗や日本に求め、日本でも新訳經典や書籍の情報を求めていた。文化の一方通行の関係ではなく、双方向になったことが特徴である。

そのような中で、東大寺僧裔然（938～1016）が永観元年（983）に初めて入宋し、優填王思慕像を摸した釈迦如来立像を台州で造立し、新彫一切経とともに入京した。三論宗東大寺の裔然と、天台宗比叡山の源信（942～1017）は、かつて宮中の論議で対峙した関係であったが、ともに撰関期を代表する学儒慶滋保胤（？～1002）とは良好な関係にあった。源信は、裔然の活躍を意識していたと思われ、積極的に北宋の天台宗と交流しようとしていた。中国でも争乱により仏典が失われていたため、逸失した経論を求めた。源信は中国僧に積極的に対応したため、杭州の源清は『法華十妙不二門示珠指』などを天台座主に贈り、その批評を要請してきた。本書には、日本で展開した天台本覚思想の萌芽というべき唯心思想が色濃く見られ、これは永明延寿の思想を発展させたとも言えるものである。この源清の著書が、日本の天台本覚思想にどのように影響したか、それが院政期の『心性罪福因縁集』にどのように結実したか、これまでほとんど論じられたことがなかった。

ところで、平安時代の大江家は、菅原家とともに文章道を領導する双壁であった。この二つの家は「累葉」としての誇りとともに、膨大な蔵書を有していた。大江家の渤海・呉越・北宋・高麗に対する対外認識を理解するには、その返書・返牒を一字一句分析することによって、はじめてその根底にあった自国意識や、家と個人への自讃意識を理解できる。

本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、撰関期・院政期の僧俗が、どのようにして中国の情報を得て、どのように自ら情報を発信し、相互の文化にどのような影響を与えたのか、ということである。本研究では、源信の動向を端緒としつつ、宋代天台教学と日本天台宗の交流、天台本覚思想の形成期における中国仏教の影響、牒状や典籍の往反を通じて日本側に何が齎され、それによってどのような思想的变化が起こったかを中心に考察したい。その過程で天神信仰など、撰関期・院政期における文人・僧侶をめぐるさまざまな思想史的課題を明らかにすることができた。

4．研究成果

本研究の目的は上記の通りであるが、申請時の研究計画調書では、具体的に以下の項目を掲げた。

対外文献・源清『法華十妙不二門示珠指』・『心性罪福因縁集』の訳注作成
『慶滋保胤』の執筆
国内外における研究成果の発表・講演と国際シンポジウムの開催
実地調査・古典籍調査

これらのうち、の『心性罪福因縁集』の訳注作成については大学院生らとともに、毎週の研究会を開催したため、大いに進展があった。研究期間内に完成には至らなかったが、龍谷大学世界仏教文化研究センターとの共催により、2024年5月27日には国際ワークショップ「『心性罪福因縁集』とはなにか」（於龍谷大学）を開催し、7月7日には国際研究集会「『心性罪福因縁集』の成立基盤とその影響」（於龍谷大学）を開催する。この場では、『心性罪福因縁集』の院政期古写本と元禄版本の校本を作成し、『『心性罪福因縁集』研究資料集』として公刊し、参加者に配布することになっている。源清『法華十妙不二門示珠指』の訳注は未完成であるが、上記国際研究集会その他において、成果の一端を示すことができよう。

は、執筆を進めているものの公刊には至っておらず、2024年度より新たに補助を得た科研費基盤研究(C)「平安期における白居易仏教思想の受容と展開」の中で完成を目指す。

研究期間内に、国内では、浄土宗総合学術大会(大正大学)・「中日古典学ワークショップ」(早稲田大学)・説話文学学会大会(早稲田大学)・日本佛教学会(駒澤大学)・「中日古典学交流と融通ワークショップ」(北京大学)で、計5回の研究発表を行った。また、中国人民大学(オンライン)・浙江工商大学(オンライン)・湖南師範大学(オンライン)・早稲田大学総合人文科学研究センター研究フォーラム・早稲田大学多元文化学会大会・藝林会大会(オンライン)・常州大学(オンライン)・浙江工商大学・浙江省中日関係史学会・龍谷大学・杭州西湖風景名勝区管理委員会・浙江外国語学院・北海学園大学・清華大学において、計14回の公開講演(含招待講演)を行った。さらに西安電子科技大学では高端外国専家に任命され、研究課題に関連する集中講義を3回にわたって実施した(うち2回はオンライン)。このうち、早稲田大学・北海学園大学・浙江工商大学における国際シンポジウムは、本科科研費との共催事業である。本研究は、日本の基盤研究(A)に相当する、国家社会科学基金重点項目「古代中日佛教外交研究」(代表:浙江工商大学東亜研究院江静院長)と連動しており、2022年度後半期から急速に連携研究を実施することができた。

平安時代における、日本と呉越・北宋交流の資料蒐集と実地踏査のため、国内では京都・奈良・大阪・福岡などに出張して、史跡調査や博物館等を参観した。中国では、2022年度末から23年度までに、南京・上海・杭州・西安・北京を訪問し、各地の史跡を調査するとともに、各大学で講演・講義や研究発表を行い、博物館等を参観した。

その他、当初の目的からさらに視野を広げ、明代の仏伝『釈氏源流』の共同研究を、研究会を結成して進めており、その一端は2023年度説話文学学会大会においてパネルを構成して研究発表を行った。近くその成果は、『説話文学研究の海図 説話文学学会六〇周年記念論集』(文学通信)として出版される予定である。

本研究では、撰関期・院政期の、仏教・対外認識・文学表現を、同一の視点から分析することによって、従来指摘されていない日本思想の新たな本質に迫ることを目指し、国際共同研究を行うことによって、一定の成果を挙げることができたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 13
2. 論文標題 菅原文時「為謙徳公報恩修善願文」訳註	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『多元文化』	6. 最初と最後の頁 18-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 288
2. 論文標題 平安時代における仏教と孝思想 菅原文時「為謙徳公報恩修善願文」を読む	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雫雪艶・黒田彰編『東アジアの「孝」の文化史』 勉誠社	6. 最初と最後の頁 208-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 274
2. 論文標題 呉越・宋・高麗への返書・返牒と自讃 大江家伝来の外交文書と対外意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 瀧朝子編『呉越国 10世紀東アジアに華開いた文化国家』 『アジア遊学』 勉誠出版	6. 最初と最後の頁 40-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 12
2. 論文標題 磯長聖徳太子廟と「廟嶋偈」をめぐる言説	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『多元文化』	6. 最初と最後の頁 47-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 11
2. 論文標題 日本古代の漢文学における禹の形象 附・湖南省大禹碑探訪記	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多元文化	6. 最初と最後の頁 44-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 15
2. 論文標題 渤海使関係文筆資料注釈稿 『続日本後紀』承和九年三月辛丑条所載「別状」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学日本古典籍研究所年報	6. 最初と最後の頁 100-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉原浩人	4. 巻 10
2. 論文標題 慶滋保胤「春生逐地形」詩序訳註 白居易詩文摂取の方法(三)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『多元文化』	6. 最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件(うち招待講演 12件/うち国際学会 11件)

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 唐西明寺道宣・道世の仏教史観と奈良・平安の仏教
3. 学会等名 浙江工商大学東亜研究院主催、科研費「撰閏期・院政期僧俗の呉越・北宋との相互交流と思想的影響」共催「佛教と古代東亜世界」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 『善光寺縁起』の疫癘表現 『請觀音經』から『善光寺如来繪伝』へ
3. 学会等名 日本佛教学会第92回学術大会「仏教と病」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 許渾『丁卯集』と平安朝漢文学
3. 学会等名 「中日古典学 交流と融通ワークショップ」第四回学術シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 西明寺道宣と阿育王塔伝承 日本仏教に与えた影響とその意義
3. 学会等名 清華大学外文系講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 日本古典文献の基本図書と検索方法
3. 学会等名 浙江外国語学院東方語言文化学院講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 唐・五代・北宋時代の日本における西湖のイメージ
3. 学会等名 杭州西湖風景名勝区管理委員会・杭州市園林文物局・杭州市西湖世界文化遺産監測管理センター主催「西湖文化在亞洲地区的傳播及影響」 國際論壇（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 『釈氏源流』仏教東伝記事の歴史観と挿図の意味
3. 学会等名 説話文学会2023年度大会シンポジウム「説話の文学・美術・宗教 『釈氏源流』を軸に」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 『聖徳太子絵伝』の秘事口伝 - 救世観音の転生と真宗 -
3. 学会等名 谷大学世界仏教文化研究センター・学術シンポジウム「聖徳太子と真宗の文化遺産 秘伝・図像と信仰の世界」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 阿育王塔伝承の中国と日本への展開
3. 学会等名 浙江省中日関係史学会年度大会・第二回「浙江と東アジア」国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 磯長聖徳太子廟と「廟岨偈」をめぐる言説
3. 学会等名 早稲田大学多元文化学会2022年度春期大会シンポジウム「聖徳太子1400年遠忌記念 聖徳太子の実像と伝承」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 平安時代の白山信仰と泰澄伝
3. 学会等名 令和四年度藝林会学術研究大会「山岳信仰をめぐる諸問題」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 慶滋保胤の『白氏六帖』受容
3. 学会等名 早稲田大学総合研究機構日本古典籍研究所・早稲田大学スーパーグローバル大学創成支援事業国際日本学拠点・北京大学人文学部・北京大学中国語文学系主催「中日古典学ワークショップ」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 杭州西湖を愛した白居易と平安朝文人貴族
3. 学会等名 常州大学外国語学院シリーズ講義「アジア共同体の構築 その歴史・文化・思想」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 大江匡衡「天台返牒」を読む 杭州と比叡山を結ぶ天台典籍
3. 学会等名 浙江工商大学東亜研究院・日本研究中心主催「五洲講壇」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 『心性罪福因縁集』と奉先源清の著作
3. 学会等名 令和3年度浄土宗総合学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 杭州水心寺斉隱の果たした役割 北宋・撰閑期の書籍往反
3. 学会等名 「東アジアから見た中日文化関係 渡日中国人を中心に」国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 湖南省の大禹伝承と日本古代の禹の形象
3. 学会等名 「東アジア視野における湖南と日本」国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 『大乘本生心地観経』訳経と日本文人への影響 般若・靈仙・白居易・菅原文時
3. 学会等名 早稲田大学総合人文科学研究センター2021年度年次フォーラム 国際シンポジウム「東アジア文化交流 古代・中世仏教の相互往来」 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉原浩人
2. 発表標題 呉越・北宋の書籍・文物交流と平安仏教・文学 源信と齋然を中心に
3. 学会等名 中国人民大学日本人文社会科学研究中心・中国人民大学外国語学院日語系・早稲田大学日本宗教文化研究所共催講演会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 早稲田大学総合人文科学研究センター2021年度年次フォーラム 国際シンポジウム「東アジア文化交流 古代・中世仏教の相互往来」	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 国際シンポジウム「世界にひらく日本宗教文化」 於北海学園大学	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 国際研究集会「佛教と古代東亜世界」 於浙江工商大学東亜研究院	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

中国	浙江工商大学東亜文化研究院	湖南師範大学外国語学院	西安電子科技大学外国語学院	
韓国	蔚山大学校人文大学日本語日本 学科			